

岩本千綱の冒険的タイ移民事業（1894—1896）

岩本千綱（1858-1920、高知県士族、1879年12月卒の陸軍士官学校旧3期生）は、『暹羅探検実記』（1893年）、『暹羅老撾安南三国探検実記』（1897年）、『仏骨奉迎始末』（大三輪延弥との共著、1900年）の3著の著者であるが、明治期の初期日タイ関係の形成において、岩本千綱は極めて大きな役割を担った。

特にその2回に亘る移民事業（1894年12月第1次移民30人前後、1895年10月第2次移民20人）は、在タイ邦人を増加させ、邦人保護の必要から領事館・公使館の新設（1897年6月稲垣満次郎公使着任）、日暹友好通商航海条約の締結（1898年2月調印）への契機を作った。

バンコクの公使館新設は、ハワイ、メキシコ、ブラジルと同年度予算で実行され、ともに邦人の移民（＝出稼）対象地としての現実及び将来性への考慮が働いた結果である。

しかし、岩本の杜撰で詐欺的とも言える、現実離れた移民計画（バンコク近郊で10ライの借地農業で1年350円の粗収入があるなどと移民に約束）がバンコクで露見し、第1次移民は収入が良い仏人経営のブカヌン **บุษยณู** 金鉦山に鉦夫として移り、10数名が熱帯性マラリアで死亡、第2次移民も様々な理由で多くの死者を出したが、そのうち数件はコーラート鉄道建設現場においてであった。

岩本の移民事業が失敗した後、暹羅移民は事業として実施されることがなかったこともあって、タイ移民事業についての詳細な研究は存在せず、一方タイ国日本人会の「日本人第一回移民の碑」（1966年、ゲンコーイ寺 **วัดแก่งคอย สระบุรี** に設置）などには事実とはかけ離れたことが記されている。

本報告では、第1次、第2次タイ移民の実態（募集地、募集方法、応募者、渡タイ後の就業地、死亡原因、人数）や失敗の要因等を簡単に説明したい。

詳しくは村嶋英治「1890年代に於ける岩本千綱の冒険的タイ事業：渡タイ（シヤム）前の経歴と移民事業を中心に（上、下）」（上は『アジア太平洋討究』26号で既刊、下は同27号で2016年後半刊行予定）を参照して頂きたい。

タイ移民に関する記述

- ① 宮崎滔天（南蛮鉄）「暹羅殖民始末」、『国民新聞』1897年7月24日～8月4日連載
- ② 入江寅次『邦人海外発展史（上、下）』（移民問題研究会、1938年1月20日発行）、上巻は538頁、下巻は546頁。上巻第10章として暹羅**移民**始末（上、下）213—231頁
- ③ タイ国日本人会「日本人第一回移民の碑」（1966年）
- ①と②ではどのように移民をリクルートしたのか不鮮明、ブカヌン（ブカノンと表記）の場所を「コラツトの西北方凡八十哩」と誤解。③は、第1次と第2次移民とを混淆した上、大部分の移民の死亡場所をコーラート鉄道建設現場と誤解している。

第1次移民（1894年12月出発、人数は資料により人数26名～32名）

移民有望地としてのシャム、1889年にサーイ親王等が設立した Canal Irrigation Company のランシット地区等での新田開発、耕作労働力の不足（**斉藤幹の報告書地図**）、稲作生産性に関する日本人調査者の**超過大推計（生産性比較表）**

岩本の第1次移民は移民取扱人小倉幸（おぐら・こう）が、ハワイ私約移民のために山口県周防大島及び対岸の玖珂郡で1894年初秋に募集した者のなかから分けて貰ったと考えられる。（**第1次移民リスト**、大島出身の**面田利平**など）。出稼希望だが、ハワイ契約移民には合格できないと自覚してタイ行きに変更したと思われる比較的高齢者もいる。実際にハワイに渡航して身体検査不合格のために帰国せざるを得なかった者（大島出身の中尾、岡口、**旅券下付表**）も、帰国後直ちに第1次タイ移民に加わっている。

日本の民間実業家の移民ビジネスは、榎本武揚外務大臣の斡旋で1891年に発足した吉佐（よしさ）移民会社のニューカレドニアのニッケル鉱山労働者募集に始まる。ハワイのサトウキビ耕作労働については1885年から官約移民が実施されたが、1891年には民間人の小倉幸（大阪の朝鮮貿易業者、ハワイの日本移民向け商品輸出にも進出）は私約移民をハワイに送っている（**初期の移民会社リストと実績**）。

日本の移民希望者は労働力に欠ける外国の受入先と、移民会社を仲介者として労働契約を結び移民する。岩本の移民会社（日暹協会、続いて暹羅殖民会社 Siam Emigration Company）は、タイ側に明確な受入先がないまま、10ライ（1.6ha）の農地を小作しても、日本の5倍近い収入があると約束した（日本の日当1日20銭前後、月6円年72円が最大限だが、岩本は粗収入350円を約束）。

バンコクで現実に直面した第1次移民は農業を諦めバンコクドックで就業、続いてブカヌン金鉱山に工夫として移り、ブカヌン到着後2ヶ月以内に10数人が熱帯性マラリアで死亡。

ブカヌンの位置・地図、バンパコン河の支流ナコンナーヨック川をプラチンブリーの ประจันตคาม 郡 บ้านปะเทท まで舟行し、その後徒歩で山越え2日（30キロ）で มุขมุน (現在 หมู่ 2 บ้านท่าวัง ไทรค้ำบลังหมี่ อำเภอรังน้ำเขียว นครราชสีมา) 到着。

第2次移民（1895年10月出発、熊本県人20名）

岩本千綱（暹羅殖民会社）が、広島海外渡航株式会社に依頼して、同社が熊本県で募集した（**九州日々新聞の募集広告**）。

移民保護規則（1894年）を管轄する外務省通商局は、少数移民で採算の合わない場合でも移民取扱人に代理人を同行させることを強制。ハワイ移民で利益を上げていた海外渡航株式会社は、宮崎滔天を代理人として雇傭して同伴渡タイさせる（宮崎は1896年6月、同社の賃金未払いを理由に無断帰国）。第2次移民については旅券下付表が見当たらないが、様々な原因で、異なる日時に死亡。コーラート鉄道で死亡した者は2名程度に過ぎずない（**海外渡航株式会社移民死亡者報告、日本人会過去帳**）。

結局20名中タイに残ったには、柳田亮民（本籍愛媛県、日本で僧侶経験）のみ。